

## 図書紹介・New Publications

魚類学雑誌  
54(1):90-91

### □ 魚類学

**Reef and shore fishes of the Hawaiian Islands.** —John E. Rnadall. 2007. University of Hawai'i Sea Grant College Program, Honolulu. 546 pp. ISBN 1-929054-03-3. ジョン・E・ランドールの名著。ハワイ諸島の浅海域から水深200mまでに生息する魚類612種を1007枚の写真や図で紹介。このうち、944枚はカラー写真で、多くは著者自身が撮影した水中写真である。著者はインド・太平洋域を広く股にかけて魚類の研究を行っているが、本書は彼のホームグラウンド、ハワイ諸島の魚類図鑑である。そのため、これまで彼が出版してきた各海域ごとの図鑑と比べても、本書の内容の濃さは群を抜いている。750を超える豊富な引用文献、詳細な特徴や分布の記載に加え、本書には種の検索表が付記されているため、海産魚類の研究者にとって必携である。また、魚類に興味がある者やダイバーにもオススメである。本書は下記のサイトから注文できる。US\$140+送料。http://www.soest.hawaii.edu/seagrant/communication/RSFHI/。  
(本村浩之)

**Fins into limbs: evolution, development, and transformation.** — B. K. Hall, ed. 2007. The University of Chicago Press, Chicago. 433 pp. ISBN-10: 0-226-31337-9. 魚類の対鰭は四肢と相同である。本書は副題にもあるように、両構造の関係を進化(第1部)、発生(第2部)および変遷(第3部)の観点から論じている。収録論文は19本で、著者は編者を含め37名にのぼる。これらの数字からもうかがえるとおり、扱われているトピックスは極めて多分野にわたり、古生物学分野の情報も充実している。鳥類や哺乳類も話題に含まれ、「魚類学」からはやや外れる点もあるが、本書をひもとき「魚類の末裔たち」に思いをめぐらすのも悪くはない。ペーパーバック版が約6,000円とお買い得の価格で入手できる。  
(佐々木邦夫)

**Fish biomechanics.** —R. E. Shadwick and G. V. Lauder, eds. 2006. Elsevier Academic Press, San Diego. 542 pp. ISBN-10: 0-12-350447-3. 「Fish Physiology Series」の第23巻。タイトルからも想像されるように、おおむね機能形態学の範疇にくくられる12本の論文を本書は収録している。機能ごとに論文が割り振られていて、「呼吸」、「吸引摂餌」、「咽頭類」、「側線系」、「骨組織」、「骨格筋」および「遊泳」などが議論されている。特に「遊泳」には5論文が当てられていて、この分野に興味をもつ会員にとって、本書は必携といえるだろう。魚の行動とタムの構造や漁具との関係といった水産色の濃い1論文も巻末に収められている。14,000円程度で購入できる。  
(佐々木邦夫)

### □ その他

医学・生物学研究者のための Powerful Vocabulary 2. —林 皓

三郎・L. C. Hooper. 2006. メジカルビュー社、東京。421 pp. ISBN4-7583-0412-2. 3,500円(税別)。すでに書店などで本書をお手に取られた方も多いと思う。著者の英語表現に関する3冊目の書で、前作の動詞編に続き、形容詞、副詞編が昨年10月に上梓された。医学、生物学関係論文で頻用される約1,300語をとりあげ、それぞれについて、実際の使用例(複数)を示しながら、その単語の持つ語感に迫ろうとしている。その1,300語が18の章に大きく分かれ、さらにそれぞれが細分化されている。英語に深く関わってきた方は、例えば「真実の」という意味合いを持つ形容詞にしてもこういう単語まで組み合わせるのかと、本書の構成を眺めるだけでも目から鱗かもしれない。ざっとみると「辞書」然とはしているが、各章の書き出しには短い内容のある文章があり、読み物としても興味深い。動詞編の場合には、著者の示す日本語の意味合いとか、単語が使用される頻度とかにそんなに違和感はなかったが、やはり形容詞になると、医学と生物学を横断することが難しくなるのかもしれない。また、本書は、論文を書くときになって本棚から取り出して試みても、すぐに役立つハウツー本ではないかもしれない。時間があるときにパラパラとめくっていると、ストンと腑に落ちる説明に出会えるような、そんなことが動詞編の場合には多かった。見出しの単語につく「\*」は、その数が多いほど使われる頻度が高いことを示している……らしい(本書中には説明がないが、動詞編と同じだろうと思う。ちなみに動詞編では4つ星単語がかなりあったが、本書では3つ星すら珍しい。パソコンを使って、機械的に集計でも施した結果なのだろうか)。

(白井 滋)

**分子進化と分子系統学.** —根井正利・S. Kumar(著)、根井正利(監訳・改訂)、大田竜也・竹崎直子(訳)。2006。培風館、東京。410 pp. ISBN4-563-07801-8. 7,000円(税別)。本書は2006年7月に出版されたので、私の手許に来てからもう一年近くになる。2000年にOxford University Pressから出された“Molecular Evolution and Phylogenetics”(M. Nei and S. Kumar)の和訳に、著者(根井)自らが推敲、改訂を行った書である。本書を開くと、著者自身による前作「分子進化遺伝学」(培風館、1990)と間違ったかと思うほど、両者にはよく似た印象がある。しかし、本書の原典である英語版と同様に、さまざまな数学的手法やそのベースとなる考え方が要領よくまとめられていて、前作に苦闘した私も比較的容易に読み進むことができた。著者が「日本語版への序」で書いているように、英語版が出版されてからの期間、この分野では多くの議論があった。そのため、4つの章では新たなサブタイトルが入り、筆が加えられている。その他の章にも多くの加筆、改訂があり、中には本書が出版された2006年の文献までちゃんと掲げられている。必ずしも近年の急速な進展を紹介するだけでなく、専門家としての冷静な目を見た所感が増えられているのがいい。値段を見て怖じ気づく向きもあるかもしれないが、魚類学の様々な分野でも今や欠かせないものと

なっている系統樹的な思考を理解する上で、側に置いておき

たい図書の一つである。

(白井 滋)

## 会員通信 · News & Comments

魚類学雑誌  
54(1): 91-92

### 新知見紹介

トウゴロウイワシ科ヤクシマイワシ属 *Atherinomor*  
*lacunosus* と *Atherinomor*  
*pinguis* の標準和名

Standard Japanese names of two atherinid fishes,  
*Atherinomor*  
*lacunosus* and *Atherinomor*  
*pinguis*

*Atherinomor*  
*lacunosus* (Forster) と *Atherinomor*  
*pinguis* (Lacepède) は、ともに本邦を含むインド洋-太平洋のほぼ全域に分布する。両種はよく類似し、従来からしばしば混同され、近年では同一種とされてきた (Ivantsoff and Crowley, 2000 など)。筆者らは現在知られている両種の全分布域から得られた多くの標本に基づき、これらがそれぞれ別の有効種であることを明らかにした (Kimura et al., 2007)。この論文では、*Atherinomor*  
*lacunosus* には瀬能 (2000) と同様「ヤクシマイワシ」の標準和名を与え、一方 *Atherinomor*  
*pinguis* には「ホソオビヤクシマイワシ」を新たに提唱した。しかし、その根拠については説明されていなかった。本報告では、両種の標準和名について、その根拠を説明する。本報告に対して、コメントを頂戴した鹿児島大学総合研究博物館の本村浩之博士および匿名の査読者に対し、厚く御礼申し上げる。

「ヤクシマイワシ」は、タイプ産地が屋久島である *Atherina morrissi* Jordan and Starks に対し命名された「ヤクイソイワシ」(Jordan, Tanaka and Snyder, 1913) が元になり、その後、岡田・松原 (1938) によって、この種に対して新称とされたものである。Kimura et al. (2007) は両名義種のタイプ標本に基づいて、*Atherina morrissi* は *Atherinomor*  
*lacunosus* の新参シノニムであると結論づけた。したがって *Atherinomor*  
*lacunosus* の標準和名には、その新参シノニムである *Atherina morrissi* に対して提唱されたヤクシマイワシ用いるのが妥当であると判断された。

松原 (1955) は日本産ヤクシマイワシ属魚類として、ヤクシマイワシ *Pranesus morrissi* とナンヨウトウゴロウ *Pranesus insularum* の2種を認めた。しかし現在までの筆者らの調査では、*Atherinomor*  
*insularum* (Jordan and Evermann) は日本近海から採集されていない。また松原

(1955) の検索表を使うと、*Atherinomor*  
*pinguis* やネットアイソイワシ *Atherinomor*  
*duodecimalis* (Valenciennes) のほか、*Atherinomor*  
*lacunosus* の一部も「ナンヨウトウゴロウ」に同定される。

「ナンヨウトウゴロウ」は、瀧澤 (1942) によると、田中 (1927) によって命名されたとされている。田中 (1927) は、台湾産の1標本を *Atherina insularum* と同定し、再記載した。この再記載は *Atherinomor*  
*pinguis* やネットアイソイワシと比較的よく一致した。また本標本の図では、口は小さく、上顎の後端は眼の前縁に達する程度であり、この特徴はネットアイソイワシと類似している。しかし、本標本の第1背鱗は7棘とされ、*Atherinomor*  
*pinguis* の4-6本 (60個体; Kimura et al., 2007) やネットアイソイワシの5-6本 (68個体; Kimura et al., 2001) との相違もみられる。

このように、田中 (1927) の「ナンヨウトウゴロウ」は完全には一致しないもののネットアイソイワシである可能性があること、松原 (1955) の「ナンヨウトウゴロウ」は複数種が該当し、種を明確に特定できないことなどから、*Atherinomor*  
*pinguis* に「ナンヨウトウゴロウ」を用いることは、明らかに不適當である。また、これ以外にもこの種に与えられたと特定できる和名はないと判断されたため、Kimura et al. (2007) は *Atherinomor*  
*pinguis* に対し「ホソオビヤクシマイワシ」という新標準和名を与えた。

### 引用文献

- Ivantsoff, W. and L. E. L. M. Crowley. 2000. Atherinidae. Silversides (or hardyheads). Pages 2113-2139 in K. E. Carpenter and V. H. Niem, eds. FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the Western Central Pacific, Vol 4. FAO, Rome.
- Jordan, D. S., S. Tanaka and J. O. Snyder. 1913. A catalogue of the fishes of Japan. J. Coll. Sci. Tokyo Imp. Univ., 38: 1-497.
- Kimura, S., D. Golani, Y. Iwatsuki, M. Tabuchi and T. Yoshino. 2007. Redescriptions of the Indo-Pacific atherinid fishes, *Atherinomor*  
*forskali*, *Atherinomor*  
*lacunosus*, and *Atherinomor*  
*pinguis*. Ichthyol. Res., 54: 145-159.
- Kimura, S., Y. Iwatsuki and T. Yoshino. 2001. Redescriptions of the Indo-West Pacific atherinid fishes, *Atherinomor*  
*endrachtensis* (Quoy and Gaimard, 1825) and *A. duodecimalis* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1835). Ichthyol. Res., 48: 161-177.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索I. 石崎書店, 東京. xi+789 pp.
- 岡田彌一郎・松原喜代松. 1938. 日本産魚類検索. 三省堂,